

新局玉石童子訓

卷十



一選
1279
35



新局玉石童子訓卷之二十

東都 曲亭主人人口授編次

第五十回

一金一藥盲龜浮木不遇
押繪禍と告て成勝通能と行

前回の如く、鼓笛をとりける大江杜四郎成勝、峯張六郎通能、岐嶼の山院に逗留の程、住持の話說ふを、めでたし知る。上野甘樂、ふり、最
多、抜るの雨村、小武藝、小長、うる者、まうら、あて、見、思、遂、住持、
別れを告げて、東と投て、ゆく程、山又山、る、鄙、小、勝、景、勝、地、を、
岐嶼の棧、梯、踏、見、上、る、現、世、渡、の、易、う、る、身、の、危、殆、も、思、合、さ、れ、
川の音、小、の、と、少、一、淺、隈、小、起、り、煙、後、小、見、做、く、夜、小、宿、り、日、小、又、歩、む、路、の、程、
川中嶋、る、善、光、寺、上、下、の、諏、訪、い、へ、由、と、是、再、遊、料、り、か、さ、れ、神、社、佛、閣、海、

曲る山路の嶮岨と物ともせま素より急ぐ旅する日長は四月の時候
 るまに疲れて懇に饑て食ふ三宿五宿日と累ね上野甘樂小宿り一日
 或の茶店馬奴轎夫も小最る抜るの両村の那里を問試る絶て是を
 知る者も然る村の名も不のまも知らずと答る而已是中成勝通能を
 分々束ける岐岨山里の雲も似る疑ひの霧の離色小立心地向て遠
 去秋余らむの誨え法師の虚談秋と思惑ら其宵の程逆旅主人を召
 よそ又彼村の事を問ふ主人一霎時沈吟とて開き少錯へりる見
 約莫の甘樂一郡最る抜ると喚做した村落はあるともあるとも
 くいと成勝通能へはく望と失ひて思難々惘然とらむ當晩合宿
 る一箇の客僧隣房小在り件の問答と洩せけりら咳を饒へり
 りら間の隔亮と答ら半分推用と成勝号小向ひては言卒余と

無礼なれども各位の尋ぬ最る抜るの両村の部領の荘のこころと部
 領とのも異名も其舊の名は白猪と各位も兼知るん在昔公家一統の
 御時の相撲の節會はまて當年の秋毎諸國の力士と徴れ其御使
 立ると部領使と倡り當初上毛も白猪の御も公家御領も部領
 使も充り官人達の知所も其頭小とあらは是かよと白猪の異名と
 部領の井莊と喚做した然れば又その枝村小最る抜るの名と負せり好
 事の者此所為也あら亦是部領小傳會せり而已昔相撲小最る抜るの
 稱呼あり今の大関関脇の類れも白猪小所云最る抜るを全其
 美小あらむが彼首必秋毎小穂屋と作りて稲小寄る猪鹿と逐小故小
 其地小字と穂とといけり又蕎麥の信濃小劣らむ挽抜小宜しけり
 抜ると字あるの皆是正に名小あらね近郷の者も是と知れる稀

三石山子言卷二十

二

三石山子言卷二十

るべし。然ると和君も其地の字をのりて。覺て人小問の尋説あり。故に小
 あり。今より後へ白猪も部領も。尋の又相違あり。言可
 寧小説示成勝通能。兼て俱小膝の我む。覺て成勝の件
 客僧小謝し。我々。我們遠く他郷小を。然る故より。知らざる。只徒
 人小問て。尋る里あり。人の為小笑る。生涯悔。ある小。和尚一字の
 師。哉最忝く。通能も俱の争。件の莊武。武士。夜莊客
 樵夫小至る。角力白打。能きも。武藝。長たる。又。から。と。回
 客僧。今戦國の習俗。里の総角牛打童も。武藝を
 嗜る。豈只部領の莊の。開。地僧の知る。那里。向
 る。必分明。成勝。共。小謝。教諭。大畧
 る。部領の莊。路程。這里。幾里。と。向。客僧。然。七

里不足。六里。遠。荒芽山。右方。小瞻。田文の茂林。路。十
 数町。白猪。届る。今突鳴。遠寺の鐘。僕
 却。夜の短。既。初更。憶。辯。時。寝。を
 隔亮。故。如。小。困。開。儘。草。入。る。折。立。難。傷
 聞。逆旅主人。耳。新。珍説。貌。合。笑。辭。奥。退。け。
 當下。杜四郎。成勝。通能。叫。現。訛。御。談。野。語。解。易。
 から。今。創。ぬ。今宵。那。客僧。逢。せ。孰。漏。り。白猪。到
 ら。能。通。能。點頭。是。思。合。れ。御。向。岐。岨。那。行。最
 多。拔。の。兩。村。在。昔。秩。父。重。忠。と。角。觝。の。勝負。と。試。け。長。居。願。盡。の。ぞ
 思。い。れ。餘。談。の。要。る。夜。や。深。く。俱。小。枕。小。就。死。より。明日。の。去。向。の。遠。から

ち。稍熟睡あるを見。情地不巳。衣と脱て。親不被けて身の寒さを
 鞞つ。是るは媪が朝夕見えてよく知る所あり。余の餘人傳不覚る。那替
 者。が女児と俱して。這地。小旅宿を。比。両眼明亮る。ける。人の痛く
 擡とく。左右の眼と打洗され。刺前臍と打折して。廢人。あり。の。さ。た。
 其。お。盤纏と亡して。せ。樹の。る。隨。小。女。兒。と。俱。小。茲。小。ま。ろ。千。劍。破。神。の。代。の。
 穴居と。飲。宿。似。て。親。の。さ。り。可。惜。女。兒。と。洞。不。起。臥。ま。る。薄。情。や。熊。の。
 後。身。飲。薄。命。人。の。傳。り。の。り。と。い。ふ。成。勝。う。ち。夢。て。开。る。苦。々。し。死。る。り。死。
 親。の。打。擲。せ。られ。其。る。罪。う。知。ら。ね。も。夢。が。如。死。の。少。女。の。孝。行。孰。快。憐。
 思。へ。る。死。然。る。今。群。集。の。衆。人。が。他。の。屢。乞。れ。も。鏹。一。文。も。取。ま。る。者。
 る。各。々。面。と。背。け。り。是。い。る。心。と。と。再。度。向。き。て。然。れ。が。と。开。ら。り。か。死。
 情。由。り。と。い。ひ。吹。笛。會。抗。て。女。小。鐘。の。下。の。煙。立。り。蒼。柴。の。火。と。吹。て。通。

能。も。件。の。話。説。と。せ。り。成。勝。小。向。い。て。の。毎。日。世。の。不。平。の。事。を。知。れ。る。人。の。
 性。の。皆。善。る。小。然。る。孝。女。と。見。り。知。り。り。縦。此。の。情。由。あり。と。も。並。て。憐。れ。
 者。る。死。の。あ。ら。わ。が。死。と。い。ふ。と。成。勝。然。と。心。へ。俱。不。嘆。息。を。り。け。
 浩。り。一。程。小。前。回。る。衆。人。の。皆。立。去。り。其。頭。小。人。あ。ら。ざ。る。り。か。を。食。少。女。
 父。向。い。て。今。日。も。亦。幸。る。と。物。類。る。人。の。あ。る。と。い。は。れ。ば。さ。る。餓。さ。せ。ぬ。け。ら。
 い。ふ。せ。り。と。う。ち。不。快。と。替。者。の。少。あ。ま。ま。否。も。然。ら。り。欲。り。か。を。知。ら。ぬ。他。傳。小。
 呻。吟。ひ。來。ぬ。我。身。の。左。も。れ。右。も。あ。れ。久。後。馮。一。か。ぬ。死。稍。弱。草。の。女。ま。ら。
 艱。苦。一。日。と。過。さ。難。る。恥。亦。是。より。甚。死。に。る。目。さ。へ。脚。さ。へ。疳。弱。せ。ら。
 且。一。我。命。根。の。難。面。さ。疾。死。ね。か。一。思。ひ。の。ら。我。身。あ。ら。ざ。る。孰。と。亦。
 汝。の。資。助。ふ。る。者。あ。ら。え。と。思。ひ。死。し。て。蟻。蟬。の。生。甲。斐。も。る。死。命。之。猶。惜。
 る。と。い。ふ。流。る。涙。と。押。拭。へ。少。女。の。と。う。ち。泣。て。心。弱。死。と。る。宜。ひ。そ。

世よ七轉八起との常言のあるまじや。冬の枯木の雪霜の積る枝を折
 らまじも。花開く春逢ふ時あり。今の辛苦と後竟る昔語る做らば
 ろまじや。いと慰むる親子の中に涙川なり。難ても因縁愛深き心ぞ
 知らまじける。折ら部領の方よりして。團子々々と聲高やく擔櫃を
 背に駝做ます。招牌幟と衝立々々と來ふける。團子徑紀兒と少女の急ふ
 喚駐めて。や徑紀兒連阿團一串欲けれど。恥らまら今茲阿足の三
 錢のとそか。二錢の明日まで貸あひねといと徑紀兒少あま噫言は言ひ
 るよ。五錢の團子と之文の賣らる明日よりいふあて。我妻我子と養ふべき
 況和女親子少或方さほより吟呻らます。何もれ賣れぬ情由あれども
 尙金一分出る内緒で一串賣もせんの一分金さらん今尙量あら
 兼がらり。天止々々と欺はるもりまさす。嗚と少女の二ひ喚駐めて。

只其團子一串の價と一分とのいろの實一からまあれとも。非除去未れ
 壹分もれ親の饑み易からり。今其財あるまじ露宿まてや日と送る
 べは。ちもども賣トとのいとと理まく買んといふあらま何をかると沈吟と
 喃小父上見らま如く質として預らる東西のあらまけま我黒髪をまお
 らせんといろ傷と見かりて筵包と短刀を撈出ら引抜て頭影を
 剪ちまきてけると鼓者の敬馬慌々と聲下やま糸よ今今をめぬ汝の孝行親の
 會留る鼻の室り聲苦けふや今今をめぬ汝の孝行親の
 為とま一串の團子小換る黒髪を剪ちまきる世間の儔稀る所為
 るまじも。生死流轉の天り命を汝の形貌と変させる異日尙彼
 索る人の環會ふ日のありとも何をりて分説せんや先の刃と放ちてよ
 然らまじ我身先死ると禁る親も禁めらる。女兒も俱涙をさらめ



二の五の川巻

きりか

みどり



三の五の川巻

此處の本文
十二百ふえり

おら雨小追
きそ末と秋
やうきうき
遊仙庵琴鶴題

おま

あつて未だれが食ふか云々と歡びて演じて已むるまで成勝負推禁
めて。警者に向ひての答う我者前より母の言と似て見えて思ふ昔の由緒わ
る人るべし何もの故の落魄なる方僕人の噂の事さへ汝に在る日人の為の痛く
掩れて自ら脚を傷らるるあらざるや。開も所以あらん。いふふと問ま
警者の嘆嘆の堪げ。慨然として答る。既ふ知られまのり。上今あら秘
へうもの。小人が舊里の冠守の盡處で武弁の家お仕し。現乱
世の悲しき事あるもの。思ふて。世相因の主君と亡し。妻も早く世を去り。住果
へうもあられの契り。人々素んと。當時尚稚なり。這個獨女子と俱く故
郷と迷中より。廻國既年未と經て。今茲這春當國。部領の莊と過る。折少人
持病の疝積起り。一歩も運びなけれ。只得其頭の客店に宿投り。将息息
過も程の人あり。我女兒と如此々の方さ。向の喜ふま。わらせよ。と。只管媒妁

せらも下かども。開ら小人が情願るらむ。非如饑渴の逼るなり。富貴れ
家の徴ゆるりともいふ。我女兒と。妾もまもあられ。の毛を以最難面
答へ。從いさりけ。は媒妁人もうら腹立。角口果し。遂に証言
品傳て。那里逗留まると。饒さ。小人も亦堪難て。病痾瘥果れども。
然ら宿り。と更んと。女兒と俱く立去り。西と。遠く。折ら日
暮の。追蒐未ぬ。暴雄四五名。媒妁人の乾見ら。郡司殿の
奴隷らん。那盗見と。逃ま。と諸聲。叫り。近く。俣。捉細。美を
抗く打擲。と狼藉朽惜。りけれ。敵の。身。單。病痾瘥
果され。防。由。ら。悩。され。て。兩。眼。片。脚。痛。癩。の。堪。死。活。も。知
ら。作。ま。事。の。息。劇。不。懷。る。盤。纏。の。財。囊。の。奪。略
ら。ま。て。歹。人。毎。在。ら。む。然。れ。も。猶。幸。の。拙。女。の。恙。あ。ら。む。と。捉。漏。さ

ひとりうち位く而已其頭の人家稀るれば誰と勤る者も有。我身も孤
 獨の旅客えい訴ふた便着もあつど。姑且して息出されども疼痛小勝
 ぬ目へ見えむ片脚へ折けてせんかゝる死と。拙女も技掖れり。當晩這里まで
 未ふけきと猶驛路小遠ければ只得這洞穴小露宿して一宿二宿と明を
 の盤纏あらざるれば父女子が被る二領の衣を各一領沽却して且母の
 飯小充るのうら。そまら久く支也。死あわねば見ぬ人如く袖乞ふも這
 頭も部領の采邑るればや絶く憐ふ者も有。偶過る旅客の投糧を一錢を
 りて父女の饑餓と凌ぐ小足らねば現軀形の日も月も我上照しぬむやと
 世と不樂人死心するまで。うち歎かしてのあけり。尚年弱れ刀祿連の慈
 恩ハ父母小異るるも。南無阿弥陀佛と念むれば女児も涙暗と嘆息し
 外るりけ。然れば成勝と通能の真苦話説と。うち吟て俱小嗟嘆は聲と

幼むむ姑且して成勝へ又警者小向ひて。思ふ小倍。女は難
 道を守りて禍鬼小遇へる。過世の業報。欽天監疎るる小似され。福福の
 糾ふ纏の如し。今こそわれ後々の真愛と復して喜小做。幸もあぬべし。
 我小奇妙の仙丹あり。約莫刀瘡を死したるも。二日を経る者小是を
 とやく用おれ。甦生むと。況命小恙るる。其瘻汚穢と拭ふ
 が如く。即效あらむと。い者る。あ。我所親の家傳。あて世小未。曾有の
 妙丹。百六千金。小代る。親族。うち。その心正。か。あ。敢授け
 る。秘藏。佳地。る。世小稀。る。息女。の。孝順。感心。の。あ。其。仙丹。を
 目今。汝小分。與ん。あ。其。撲傷。の。四日。以前。の。目。と。見。二五
 十日。麻。止。即。效。心。許。る。け。と。然。り。と。徑。験。あ。ら。ん。や。と。と
 とい。も。腰。小。吊。たる。藥。籠。より。彼。仙丹。を。命。出。せ。通。能。も。邊。懐。と

搦撈りて出さし圓金一枚と成勝左より受取て彼仙丹とち載て卒
とて少女と與れり愛飲とむる驚くも少女の悦びのべうもわらわ幾番
とく受戴せり。母や父の商せ那二柱の方とほが却藥のて飲圓やう
る。金さへ賜りぬ禮を禀させぬといひ親の多と合りて件圓金と
探らされ。警者い呆るまで。怡悦不堪。額衝て涙と共謝しぬ。ち
仁人君子の心操。天の無復地の載るが如く通て親疎をいと。経籍史
傳。目見ぬ而已。今戰國の人心。小い大の併せらる。弱の強を征せらる。仁義
忠孝。地と拂て。残忍らぬ。罕る。小信る。君子の値遇。まられる。幸是。小
優者。然り。然り。然り。千金の代。と秘藏。ある。仙丹の。飲。一圓金と
添て施し賜れ。と故。受ん。心。然。思。意。演。惠。破
ら。是。無。禮。い。小。せ。と。沈。吟。と。女。見。と。咽。て。云。云。と。少。女。の。あ。ら。わ。て

嚮中隠を短刀と出と親の多小渡せ。警者。備措て。成勝。小
向いて。小。人。愚。直。の。性。を。嗟。来。の。食。小。あ。ら。わ。と。都。非。分。の。利。を。樂
む。と。仙。丹。と。身。の。撲。傷。小。即。效。わ。ら。受。ま。ら。む。あ。ら。わ。と。む。
開。も。這。圓。金。を。時。の。父。女。が。日。毎。の。饑。餓。小。充。く。寛。小。養。生。致。か。と。の。
故。小。已。と。因。賜。の。二。種。と。受。納。せ。る。酬。と。の。無。礼。を。と。這。短。刀。を
ま。お。せ。て。最。恥。う。い。言。る。小。人。武。弁。の。子。孫。也。累。世。一。國。守。小。仕。さ
る。不。幸。小。も。其。家。亡。び。と。世。中。の。人。小。棄。れ。る。今。日。小。至。る。也。這。短。刀。
我。君。の。夫。人。の。紀。念。る。と。秘。藏。年。來。と。歷。ぬ。甲。斐。小。い。ぬ。日。女。人。小。あ
打。擲。せ。れ。り。盤。纏。も。幼。季。も。失。た。る。幸。小。も。一。刀。の。男。食。と。れ。本。猶
あり。唐。山。の。太。阿。龍。泉。我。朝。の。鷄。九。時。鳩。及。ぶ。く。も。あ。ら。れ。と。朝。櫻。の。二。言
銘。あり。燒。及。の。聲。香。美。く。露。と。帶。る。朝。櫻。小。似。と。り。の。由。る。小。あ。ら。わ

是れ。是まわらせんと女見小渡與と成勝ヤヤと喚禁めて開る亦要る口
 誼我の孝女と賞せんそ此の資助と做せる而已報と受んぬらんや盲
 人汝の清廉人の及ば所されとも然で我本意違ふ開と云とられ
 る我寸志も空とるらん。の美をよも思ひまやと聲高やう小怨さる中も通
 能も亦云と俱論と已され少女ゆえ。警者困て頭と低ても又いよ
 去もあうけり。當下通能の猶警者と慰めて且いさう。我前より見る所なる
 かう思ふよりあり汝の搔鳴なる那樂器の何と喚做と物やら。見も孰れ
 ねが向への。とをと鼓者うち受然入那樂器の這頭小稀也。其名と渾不似
 と喚做たり。嘗聞く唐山漢の王昭君が匈奴遣嫁せられ時馬上小琵琶
 琶と抱えておたぬ然れば彼國小在り。程琵琶とのを弄ひてみり慰めたり
 是バ戎狄毎是と見て琵琶と製しと王昭君小見せけれ昭君見りうち笑

ひて。渾不似とらひ。命けて渾不似と喚做たり。其形状琉球國
 蛇皮線小似て同トカ。胴の草を用ひて。張版とて張做たり。棹の最
 太中。海老尾琵琶小似たり。是ハ四絃とて搔鳴者即是介後千百十
 數年と歴てよの土の舶來とる也。小人陸奥の旅宿とる比市小是と圖あり。この
 他國のいし見と故に浮世画小失明法師が這渾不似と捲駝する圖あり。この
 者其渾不似と知らざり四強ると誣る。明人の詩渾不似と没奈何を對
 本あり没奈何の飲酒破客と受る酒と半分飲されぬ地小漏者。渾不似及奈
 何考一編あり。委同放言再考の。載りやと思ひ。由來年更事小ち物に。老若全小至り。か言小本
 意と遂か。口腹情の。あまの。身と兵小立え。この惜けれ。冊子の。編中。假托。し。り。思。言
 する。介る小の春二月より。小人部領の客店小逗留して。病痾と瘰癧。を。患。ふ。
 たり。あうとも。這渾不似の柱小掛てあり。見せ。て。逆旅主人小同試。小主
 人小食。あ。已。が。所。藏。小。あり。或人小頼れる。賣物。小。い。と。久。く。賣。れ。ま。い。と。い。

けり小人尚古の癖ある小價直も亦廉るれ漫不足と買合もて旅宿の徒
然と慰一の媒妁児の口舌起り之猛可小那里と立去るも。渾不似我女
児の携て出ける小途の女人等の乱妨也。最も難義我小暨一かも渾不似
目と懸らんと破られもせせありけれ竟小茲を推考す。城垂山の月をて慰
ねる衆人の錢とを便着ありと今自ら思へ悪因縁過世怪しく其
傳來と説諦を辨論備りけれ成勝のゆめらと通能殆感嘆して盲人の
博識なるを我憶も字問ありと答れ教者苦矣と其身も渾不似
愛ぬ秋のてあたるまわらまべ。と通能安あむ不我の旅客るれ此其
も厭る音曲の素より嗜もむ。そを貫そ何かせと辭ふと成勝喚禁を峯
張雜譚せもあれ。少女と其仙丹と養々小薦やせや開と用るふ口
俗あり先七の茶と三ふ分りて其一箇と養々小飲せ。又一箇と養々の両眼

幾番とらう絞入れて額の瘰癧も塗まらまべ。送る一箇の脚の痛處も限る
布にて紙りて掩ね縦即效あらむとも。汝の孝順養々の老實神明佛陀の
冥助也。驗るるあべうら。公亮との是も入卒退んと通能といから共
別れと生れは教者へ少女と共小法然とて額衝て徳と感と恩と謝と惜と
別一樹の蔭一河の流流るる心汲見る成勝と通能も亦見かろ。部領の莊
へをのぞける。作者曰。此合版の傍像。前卷四十。却て成勝通能の立合版を憶
る。時を殺したれば日景の敬くを仰せ瞻て脚の運びをわら。と約莫
十餘町部領の郡司の邸宅へ程遠くまると豫守く白猪の坊小あける程。天
俄頃ふ結陰て烟と降そぐ驟雨の追れて連りふ走らる。前回と過り見直せ
彼坊の入處ふ乾浄なる茅屋あり柴門を庭敷とわが松檜の構えを。那
里の足草庵る秋坊賣の屋あり。と思ふ間も近づく隨ふ。右門内突然

と走入り呼門の裏面より二八をもちて少女の身材高く肥たが顔色も醜か
らむ太織の夾衣の轎丈袖する黒縹子の帯幅廣を後小結び麻織の禪
衣。苦桶の聲と持多。單打眠てあり。小思を成勝が喚覺されて愕然
と来て頭を拾ひて。信と見え。誰やと問ふ。當下通能の管笠引提て找入り。少
少女向いて告る。我們的旅客。今日も這頭と過る程。急雨小追ま
推参まら。折くら下晡まで暮る。小程もあら。今宵の宿と投め。欲
い。心許させぬか。と。心を少女の夢。易か。我が家の客店。宿
宿ら。況主人の外。か。幾還ん。狭知ら。宿の諾ひ。渡。莫雨の
霽る。ま。盆舎り。せ。と。想ひ。け。う。の。む。意。ふ。久。か。ら。む。必。や
霽。宿ら。と。心を成勝。も。ち。て。開。飲。べ。い。れ。小。を。饒。一。の。と。會。釋。ま。く。通
能。と。共。侶。小。框。小。尻。と。ら。拭。ま。い。少女。の。火。桶。の。火。を。吹。起。し。て。茶。を。温。め。り。兩

つ箇の茶碗小椀して盆ふうち載て卒を成勝も薦む。通能も共侶の
謝して其茶を喫る。頭を旋して四下を見る。小櫛向庭。秋と思ひ。東の
か。の。樹。拉。ある。の。と。其。頭。の。都。空。地。あ。て。葉。立。る。土。包。あり。又。其。邊。小。舎。あ
て。開。放。ち。る。窓。の。内。木。刀。捍。棒。替。古。槍。を。ま。く。板。壁。小。掛。る。見。成。勝。も。俱。小
是。と。見。て。言。ふ。お。ね。と。這。屋。主。人。の。角。觥。白。打。の。師。者。飲。武。藝。も。兼。て。教。る。る
と。と。猜。し。と。通。能。小。叫。け。ば。通。能。屢。點。頭。て。岐。祖。あ。て。坐。る。彼。任。持。の。夜。話。さ。え
茲。小。思。ひ。合。し。く。逢。ま。く。欲。と。を。叫。け。け。當。下。少。女。門。内。を。兩。箇。の。米。苞。と。見。出。し。て
噫。彼。擔。夫。の。心。鈍。さ。よ。椰。葉。詠。う。精。米。と。く。ま。お。け。る。宜。し。けれ。も。背。門。より。庖
厨。へ。入。れ。せ。那。首。小。置。の。や。あ。我。身。も。あ。ら。屬。さ。る。細。雨。を。れ。も。濡。れ。け。ん。漫。々
と。と。獨。語。て。身。を。起。し。小。簷。廊。より。出。て。木。履。と。疾。穿。て。彼。門。内。を。兩。箇。の。米。苞。を。兩
手。と。拭。て。最。輕。け。小。引。提。て。庖。厨。の。か。ぶ。袋。と。成。勝。と。通。能。の。見。け。齊。一。股。を

淡く、情地の感嘆をさしける。姑且、件の少女の開き、奥より出て来た。故
 處に坐して占れ、通能の少女に向いて、發鳥思ふ。其身の助力、世に有かざる。ふそと
 ひと少女の姿、あまぎ奴家、何ぞの替力あらん。那首の叔父、ゆり、と答て、苦を續て
 たり。當下、成勝が争う。和女郎の謙遜、深し。芳し。今日、西箇の奇事、中、御宗
 立合、阪と過る時、箇様々々の乞食、見らる。一箇、五十有餘の男子、之、兩眼
 流れて、脚折けり。一箇、二、三許、少女、る。他、親子、也。他、御宗、も、
 旅宿の程、人の需ふ、応せざる。宗、嚴しく、宿所、追れて、刺、其中、途、を、
 人、多し、追、敷、せられて、盤纏、も、初、季、も、捲、攫、れ、彼、身、の、面、部、隻、脚、を、破
 られ、より、失明、の、り、由、腰、を、立、ね、已、と、を、立、合、阪、の、洞、穴、中、に、露、宿、と、往
 還、の、人、の、憐、愍、と、を、ふ、と、の、介、る、小、井、が、女、兒、の、孝、順、也、人、の、及、ぬ、事、又、れ、也。
 其、頭、の、里、人、の、憐、愍、ま、だ、饑、渴、の、通、り、ぬ、と、を、さ、す、已、も、是、を、見、望、く、ふ、治、堪、也。則

圓金一枚と秘藏の仙丹を取せたり。并、今、和、女、郎、の、身、力、も、對、ま、ら、ぬ、也。
 皆是、奇、事、ま、り、ぬ、也。と、の、通、能、も、俱、に、争、う。只、憎、む、は、彼、者、の、彼、者、女、を、媒、妁、と、
 事、の、ま、ら、ぬ、と、怨、一、と、女、人、と、を、罪、重、け、れ、他、同、惡、と、相、譚、多、く、孝、女、の、親、と、打、擲、ま、せ、
 疾、を、負、せ、る、の、も、ら、ら、ぬ、也。盤、纏、も、行、本、子、も、奪、略、せ、て、愉快、と、思、ふ、は、強、盜、の、異、
 ろ、ら、ぬ、也。歳、る、國、守、の、る、や、世、の、乱、れ、は、是、非、を、け、れ、と、聲、高、く、論、ま、る、と、宿、の、少、
 女、の、傷、痛、け、れ、目、を、注、せ、る、林、に、れ、也。通、能、の、心、も、つ、も、猶、云、と、論、ト、け、り。當、下、
 奥、より、突、然、と、出、來、る、一、箇、の、壯、伎、あり、年、八、十、九、有、り、身、材、高、く、肥、る、漢、の、
 董、卓、也、似、ま、ら、ぬ、也。尚、額、髪、あ、れ、何、れ、も、知、る、小、角、能、る、也。二、尺、七、寸、有、り、昔、物、
 造、の、一、刀、を、跨、へ、て、も、の、り、成、勝、と、通、能、と、尻、目、を、な、り、て、障、子、推、開、簾、廊、を、
 拿、引、提、て、出、て、見、け、り。當、下、少、女、の、成、勝、と、通、能、向、向、ひ、て、争、う。身、身、の、情、由、を、
 知、り、ぬ、れ、に、要、る、は、る、と、い、ぬ、也。福、を、醸、し、ぬ、也。金、を、立、去、り、て、外、宿、を、求、め

へとの成勝通能の驚き故と向ふ少女答ふ然りと彼旅客の少女
 子と媒妁せむ欲あらん則奴家が伯兄也角舩の紳號と韓錦樞二郎と喚做
 たる。這里の主人で侍候し又今外面へ出て来た奴家が第二の舎兄也と角舩也
 奈良櫻八重作と喚做したり然るに身も知りぬる奴家が伯兄と云と謂りぬ
 ちと洩して怒り堪ねば伯兄告げて懲まへ不慮く出て来ぬ疑ひる。と成勝
 點頭て并も亦物怪の幸之我主人の面談と。理義を演て説諭る。竟思ひ復
 され。彼孝女と其親の資助する事もありと。少女の推禁せざる
 奴家の両箇の舎兄の性急ゆて人達の教諭と聞くもあらざれば。一語を
 交むと聞評及びる。後悔其首の達か。是身等の只傳聞よりぬ事此
 錯るも信る。彼旅客の疾を負て盤纏も仍季も奪取る。虚詐欺實
 事飲知らざれば。并と論る時。も程久疾もせぬ。と辯ふ。通能の言を

世の穢勇の者ありとも。理義の勝る方へ。今何の恐怖あらん。只
 這里に居て主人の還るを候て面談する。と憚る。成勝推禁せ
 ず。只匹夫の勇多らば。孝女父子のともも憐れ。堪へ。我の干渉る
 り。るらぬ。好と人と争ふ。危を忘る。大丈夫のあらざり。十二屋の豫よ
 て。敬言も忘る。平由べ。と。いそ。少女も。是も。ち。身。を。右。る
 去りぬ。とも。白猪の坊の宿投りぬ。猶安から。危ふ。り。ん。茲。を。右。る
 岐路と十町許。兎ぬ。前面。一。條。の。小。川。あり。川。を。涉。せ。新。部。領。客
 店。も。ゆる。め。其。首。の。宿。り。ぬ。と。言。語。急。迫。説。示。成。勝。通。能。飲。乘。て
 和。女。郎。の。力。の。心。操。も。多。く。治。が。芳。名。を。穿。ま。り。名。を。せ。ぬ。と
 詰。問。へ。少。女。答。て。数。る。ら。ぬ。も。奴。家。の。押。繪。と。喚。れ。侍。り。而。身。等。の。い。ろ。不。と
 復。され。成。勝。通。能。姓。名。を。告。り。好。意。を。謝。して。菅。笠。引。提。て。立。去。る。

梶二郎弟子
を江峯張
大を導ふ



十七
大坂



大坂
大坂

雨既ふ歇て雲のまゝ。斂らむ是時黄昏るのれが幾程もるく日ち暮春たり。
 是日四月十四日にて月の出づる時候るから天の曇りく朦朧る路を連ふ
 急ぐのろ。短夜るまは初更の時候の件の河原の夢て見まは船の前
 面の岸の在り呼ともく船の応るけまは焦燥の口得一霎時立住程の
 後方遙か入許又追蒐来ぬる蕉火の光り幽の見えふけり。此は是甚る
 る人とも升る亦巻を更めり。且下回の鮮分るを聴絲か。

新局玉石童子訓卷之二十終 村田

綉像畫工 一陽齋後豊豆國 

代稿 澤正次

浄書筆畹 卷之十六十七十八 卷之十九二十 喜 川知

新局玉石童子訓第五板 第自五十一回 第至五十五回 五卷 推續板

順補丸

老人をさうさうのうぢは 小半判八百千銅

第一編のいろ黄をみむくも足さひはふふ
 息まきくもあみまきくも背をさうさうのうぢは
 肩をさうさうのうぢは 足たるまきくも
 懸身血のめぐりあひ丸をくれくまきくも
 積さうさうのうぢは 痛を腹のまきくも
 丹水 常は大便秘りくも
 常 男女小児の
 此 此

頁補丸本八十七頁

凡病を患ふは先此能書... 我病は... 三年五年と種々... 某州... 方... 治... 困... 用... 君... を考...
 京都賣弘所 蛸薬師通東洞院東入町大和屋茂右衛門
 本家 西國横山町二丁目 大阪屋半藏

家傳神女湯。精制奇應丸。熊膽黒丸子。婦人經事の妙薬

製薬本家四谷隠士 弘所元留町なほ沢氏

代稿作者 澤 清右衛門

弘化三年丙午夏五月吉日發行

心齋橋筋博労町

大坂書肆 河内屋茂兵衛

大傳馬町貳丁目

江戸書肆 丁子屋平兵衛板

